

[総合的な学習の時間]

持続可能な開発目標 (SDGs) の視点から地域の課題を見出し、 主体的に課題解決に取り組む生徒の育成

ー地域発展を考える総合的な学習の時間の実践を通してー

八木ゆかり*

1 問題の所在

糸魚川市の人口は年々減少し、少子高齢化も顕著である。糸魚川市は「糸魚川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、人口減少の歯止めと地域経済の活性化を図るとともに、持続可能な社会の実現に取り組んでいる。しかし、第1期(2015-2019)の実施状況の検証では、新規学校卒業者のうち糸魚川市に就職する割合は55%(2018年)であり、目標の80%を大きく下回っている。2020年度に筆者が担当した2年生の学級では「10年後、糸魚川市はどうなっていると思うか」という発問に対し、半数以上が肯定的な意味で「今のまま変わらない」と答え、現状から地域の課題を見出し、危機感をもって将来を見通している子どもが少ないことが明らかになった。高校卒業後には半数が糸魚川を離れていく実状にもかかわらず、中学2年生の半数がふるさとの課題を認識していないという実態を目の当たりにし、こうした地域に住む子どもたちだからこそ、地域の課題を自ら見出し、主体的に課題解決に向かう態度を身に付けてほしいと考えた。

2 主題設定の理由

2002年に日本が提唱した「持続可能な開発のための教育(ESD: education for sustainable development)」は、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを目標としている。ところが、ESDの「持続可能な社会づくり」の構成概念(多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性)は抽象的で、具体的な学習課題や各教科の内容と関連づけにくい。生徒が地域の課題を現状から見出し、「自分ごと」として捉えることができないのは、これに起因すると筆者は考える。藤原(2019)¹⁾もこの点を指摘し、2015年に国連サミットで「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」が採択され、「2030年までの達成を目指す17の国際目標」が示されて以降は、SDGsの17目標をESDに取り入れるSDGs学習がESDを継承するものと位置付けている。糸魚川市も第2期総合戦略(2020-2024)の中で「人口減少に歯止めをかけ、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すためにSDGsの視点は重要」としている。つまり、SDGsの視点をもつことで「持続可能な社会づくり」が具体的なものとなり、「他人ごと」ではなく「自分ごと」として捉えることができるようになるのではないだろうか。

また、藤原²⁾はSDGsの17目標を知ることが重要なのではなく、「17の目標が私たちの社会、経済、環境のすべての持続可能な開発に関連し、広範で包括的な課題であり、解決を迫られているのだという学びが必要である。」と述べ、SDGs学習は問題解決学習であり、従来の知識伝達型学習では本来の目標である「持続可能な社会の創り手」の育成にはつながらないと指摘している。さらに、田中(2019)³⁾は、「カリキュラム観の転換」が必要であるとし、問題解決学習のカリキュラムは「『上から計画され評価される』ものとしてではなく、『教師と生徒との関わりの中で生成される』もの」とし、教師の役割を単なる知識の提供者ではなく、生徒の体験と知識を引き出すファシリテーターであり、学習全体の構成を考えるプロデューサーであり、学校と社会をつなぐコーディネーターであり、生徒とともに学ぶ一人の学習者であると述べている。つまり、SDGs学習は知識の獲得だけでなく態度の変容が求められるものであり、そのプロセスが重要なのである。

そこで本研究では、ESDの「持続可能な社会づくり」の構成概念にSDGsの17目標を取り入れたSDGs学習を長期にわたり実践し、その過程で得られた成果と課題を検証する。

*糸魚川市立糸魚川中学校

3 研究の目的

SDGsの17目標をESDに取り入れたSDGs学習の実践を通して、現状から地域の課題を見出し、「自分ごと」として課題解決に向けて主体的に取り組もうとする力が高まることを検証する。

4 研究の内容と方法

- (1) 対象者 2020年度2学年生徒140名（男子67名 女子73名）の4学級（筆者が担当する学級を含む）
- (2) 期間 2020年9月から2021年7月
- (3) 内容

① ESD授業計画の作成

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、職場体験の中止、修学旅行の延期という状況もあり、学校行事の準備と位置付けられていた従来の総合的な学習の時間のあり方を見直し、SDGs学習から地域の課題についていくプロセスを重視した新たなESD授業計画を作成する。活動の最終目標は中学3年時に行う学習成果発表とする。

② 地域発展を考える単元計画の作成と実践

本校が目指す子どもの姿の中には「地域を知り、地域に学び、貢献する」とあり、3年時には総合的な学習の時間の集大成としてこの姿の具現化を目指す。そのため、現状を知り、地域発展について考える単元計画を作成、実践する。

- (4) 検証方法 一連の学習活動から得た生徒の振り返りと学期末に行う学校評価アンケートをもとに検証する。

5 研究の実際

(1) ESD授業計画の作成

以下の①～⑤を視点とした5つの学習プロセスから成るESD授業計画を作成した。また、教科等横断的な視点を意識し、教科・領域、各種教育をSDGsに関連付けた。実践に当たっては、新たな活動を設けるのではなく、既存の人的・物的資源を活用することに重点を置いた。

（表1）ESD授業計画

月	学習活動	ねらい	教科等横断的な視点 人的・物的資源	関連する SDGs
2年	① SDGsを知る …SDGsとは何かを学ぶ			
	9月 「防災」「減災」「復興」について考える	避難訓練を振り返るとともに、火災に強いまちづくりのために自分には何ができるかを考える。	防災／避難訓練 糸魚川市駅北大火	[11]
	10月 講演「5分でわかるSDGs」読み聞かせ「マララとまほうのえんぴつ」	SDGsの概要を知ること社会問題に目を向ける。	講師：学校司書	[4]
		「質の高い教育」とは何か具体的に考える。また、地域の発展には教育が不可欠であることを確認する。	講師：学校司書 人権／国際理解	[4][5] [10]
	② SDGsを探る …社会問題を調べる			
	17目標を自分の言葉で説明する（グループ・調べ学習）	SDGsと関連する社会問題を調べ、17目標について理解を深める。特に地球温暖化とその影響について考える。	図書館／情報 環境／道徳	[13][17]
	③ SDGsで考える …問題を自分ごととして考える			
	地域イベントでSDGsを考える（グループ学習）	地域イベントと17目標を関連付け、目標達成のための具体的な取組について考える。	いといがわマルシェ	[11]
	第1回SDGs検定（グループ・調べ学習）	SDGsに関するクイズにグループで情報を集めながら解答することで、これまでの学びを振り返り、知識の定着を図る。	図書館／情報／NIE	[4][17]
	学校行事でSDGsを考える（グループ学習）	行事と17目標を関連付け、目標達成のための具体的な取組を考える。行事に新たな価値を見出すことで意欲を高める。	入学式／卒業式 球技大会／体育祭等	[4][17]
	12月 講演「地域発展のために自分ができることは何か」	地域発展に尽力している人の話を聞くことにより、地域のためにできることを具体的に考える。	講師：いといがわマルシェ実行委員長	[8][11] [17]
	1月 「情熱大陸～教育YouTuber葉一」視聴 「被爆体験証言者の講話」視聴	動画を活用した新しい学習方法を知るとともに、21世紀の新しい職業について考える。	キャリア	[4][9]
		広島平和記念資料館が配信している被爆体験証言者の講話を視聴し、平和について考える。	道徳 平和学習講演会	[16][17]
3年	2月 フェアトレードについて考える 読み聞かせ「なまえないねこ」	フェアトレードマークから「児童労働」「エシカル消費」「地産地消」について考える。 地域猫活動から、生き物との共存・動物愛護について考える。	環境／人権 国際理解 環境	[4][8] [12][16] [11][15]
	3月 GIGAスクールについて考える 第2回SDGs検定	「Society 5.0」について知り、情報モラルについて考える。 これまでの学びを振り返り、知識の定着を図る。	情報 図書館／情報／NIE	[9] [4][17]
	④ SDGsを話し合う …解決に向けて協働する			
	1学期 SDGs啓発活動	これまでの活動報告をするとともに、地域との協働を目指す。	いといがわマルシェ	[17]
	⑤ SDGsを伝える …活動内容を広く発信する			
	2学期 持続可能なまちづくりに向けた取組を知る	糸魚川市の具体的な事業施策や地元の名産品取材する。	情報／キャリア 行政／企業	[11]

	取組の周知啓発を目的としたコンテンツの制作	市内外に向けて糸魚川市の魅力を発信することを目的として、コンテンツ（Webサイト、チラシ等）を制作する。	情報	[4]
3学期	学習成果発表	これまでの活動を振り返り、活動内容とその成果を発表するとともに、地域への貢献を目指す。		[17]

※表中の「関連するSDGs」の[] 数字は、SDGsの17目標を示す。

① SDGsを知る

SDGsとは何かを学ぶ段階であり、9月に実施した避難訓練の振り返りをその起点とした。糸魚川市は繰り返し大火に襲われており、その過去から学び、被災経験を教訓とすることで火災に強いまちづくりを目指すという糸魚川市の方針をSDG11に関連付けた。この時点で「SDGs」という言葉を知っている生徒は予想通り皆無であり、「絵本でSDGs推進協会」の代表理事を務める本校の学校司書の協力を得て、絵本を用いてSDGsの概要を理解する活動を設定した。

② SDGsを探る

社会問題を調べることでSDGsについて理解を深める段階である。活動は5人グループで、各グループは17目標の中から無作為に1つ選び、図書やインターネットを活用して「この目標が設定されたのは、どんな問題があるからか」「この目標を達成するために、どんな取組が行われているか」「この目標を達成するために、私たちができることは何か」という3つの問いについて調べた。例えば、貧困率について調べたグループは日本が日米欧主要7カ国のうち、アメリカに次いで2番目に貧困率が高いことを知り、日本とは無縁と思っていたSDG1「貧困」という問題に注目するようになった。また、日本が1年間に廃棄する食料はWFP（国連世界食糧計画）が年間で支援する食料より多いことを調べたグループはSDG2「飢餓」という問題と「食品ロス」の関連に気付き、「給食の残食ゼロ」という目標を立てた。このように、「他人ごと」であったSDGsの視点が身近な問題と関連があり、自分が働きかけることができる対象であることを生徒は理解していった。調べた目標については、イメージしやすく説明するにはどのように表現すればよいか話し合った。（表1）これを生徒玄関ホールに常設し、全校に対するSDGs啓発活動の足掛かりとした。この頃から「節電」や「節水」という言葉の代わりに「SDGs」を使うなど、生徒の日常会話の中に「SDGs」という言葉が使われ始めた。

（表2）SDGs17目標を生徒が言い換えた例

	SDGsのアイコンに示されている説明	生徒が考えた説明（一例）
1	貧困をなくそう	すべての人が平均的な暮らしができる社会
2	飢餓をゼロに	すべての人が安心して十分な食事ができる社会
3	すべての人に健康と福祉を	すべての人が必要な医療を受け健康に生きられる社会
4	質の高い教育をみんなに	すべての人が学びたいときに学べる機会がある社会
5	ジェンダー平等を実現しよう	すべての人が性別に関係なく能力を発揮できる社会
6	安全な水とトイレを世界中に	すべての人がきれいな水を使える社会
7	エネルギーをみんなにそしてクリーンに	すべての人がCO2を出さない くり返し使えるエネルギーで電気を使える社会
8	働きがいも経済成長も	すべての人が気持ちよく働き働きたいと思える社会
9	産業と技術革新の基盤をつくろう	すべての人が新しい技術でずっと豊かに暮らせる社会
10	人や国の不平等をなくそう	すべての人がちがいを認め合い笑顔で暮らせる社会
11	住み続けられるまちづくりを	すべての人が安心して快適に暮らせる都市がある社会
12	つくる責任つかう責任	すべての人が少ない資源を大切に「もったいない」社会
13	気候変動に具体的な対策を	すべての人がCO2を出さない方法を考え地球温暖化を防ぐ社会
14	海の豊かさを守ろう	すべての人が海の生き物を大切に社会
15	陸の豊かさを守ろう	すべての人が陸の生き物を大切に社会
16	平和と公正をすべての人に	すべての人が法律によって守られる社会
17	パートナーシップで目標を達成しよう	すべての人がお互いに協力する社会

③ SDGsで考える

問題を自分ごととして考える段階である。自分ごととして考えやすくするために、学校行事や地域イベントを取り上げ、それがSDGsのどの目標達成につながるかを5人グループで話し合った。発問は常に「この活動で解決につながるゴールは？」とし、話し合いは「①活動の内容やねらいは何か」「②活動で笑顔になる人は誰か」「③笑顔になるのはなぜか」の3観点で進めるようにパターン化することで、SDGsの視点で物事を捉える思考の定着をねらった。「フェアトレード」を考える授業は、SDGsについて学ぶ過程で交流が生まれた京都の高校生が作成した情報誌の紹介と関連付けて行った。生徒は「フェアトレード」という対等な関係で貿易を行うことが児童労働の解決につながることを、身近な商品に「フェアトレードマーク」がついていることを知った。ある生徒は「フェアトレードの商品を買うことで、児童労働から子どもたちを助けることができる。その商品を選んで買うことは自分にも簡単にできる。」と振り返った。この頃になると、目標をいくつか記憶している生徒も増え、「SDGsの何番」という表現に変化してきた。また、1つの事柄でも視点を換えることで複数の目標につながるという気づきを重ねることで、多面的な視点で物事を捉えようとする生

徒が増えた。すべての目標につなげることを目指して、活発に議論するグループもあった。

④ SDGsを話し合う

解決に向けて協働する段階である。SDGs啓発活動については後述する。

⑤ SDGsを伝える

活動内容を広く発信する段階である。GIGAスクールのデバイスを活用してWebサイトやチラシを制作し、糸魚川市内外に広く発信する。

(2) 地域発展を考える単元計画の作成と実践

① 単元名 「地域イベントをSDGsで考えよう」

② 単元の内容

ア 題材「第9回いといがわマルシェ」糸魚川市駅北大火の翌年から始まった復興を目的とした地域イベント。

イ 育成を目指す能力・態度

ESDで育成を目指す能力・態度		本単元での具体的な内容	
能力	批判的に考える力	他者の意見をよく検討・理解して取り入れる	(a)
	未来像を予測して計画を立てる力	他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる	(b)
	多面的、総合的に考える力	様々な物事をSDGsの目標に関連付けて考える	(c)
	コミュニケーションを行う力	自分の考えをまとめて簡潔に伝えることができる	(d)
態度	他者と協力する態度	相手の立場を考えて行動する	(e)
	つながりを尊重する態度	自分が地域とつながっていることに興味をもつ	(f)
	進んで取り組む態度	進んで他者のために行動する	(g)

③ 単元計画（全4時間）

次(時数)	学習テーマとねらい	学習活動
1	(1) 地域イベントでSDGsを考える 地域イベントと17目標に関連付け、目標達成のための具体的な取組について考える。	・イベントの内容や出店者、扱っている商品について調べる。(a) ・イベントや扱っている商品で笑顔になる人と理由を考える。(c) ・SDGsのどの目標の達成につながるか話し合う。(d)
2	(2) 講演「地域発展のために自分にできることは何か」 地域のためにできることを具体的に考える。	・いといがわマルシェ実行委員長の講演(f) ・地域発展のために自分にできることは何か考える。
3	(3) SDGs啓発活動 (4) 活動報告をするとともに、地域との協働を目指す。	・SDGsの啓発活動（情報誌の配布、認知度調査の実施）(b)(e) ・活動報告(g)

④ 実践の様子

ア 第1次 地域イベントでSDGsを考える

84%の生徒がイベントに行ったことがなく、生徒はチラシを手掛かりにイベントの様子をイメージしながらグループで話し合った。互いに関わりながら活発に話し合う様子に、育成を目指す能力・態度の(a)(d)を見ることができた。「イベントの意義は」という発問では生徒の活発な話し合いを引き出すのは難しいが、「SDGsのどの目標につながっているか」と発問することで17目標が指針となり、生徒は考えを広げることができていた。(表2) 17すべての目標に対して意見が出た結果からも充実した話し合いが行われたことが分かり、育成を目指す能力・態度の(c)が達成できたことも明らかである。

(表3) いといがわマルシェがつながっていると考えられるSDGs17目標

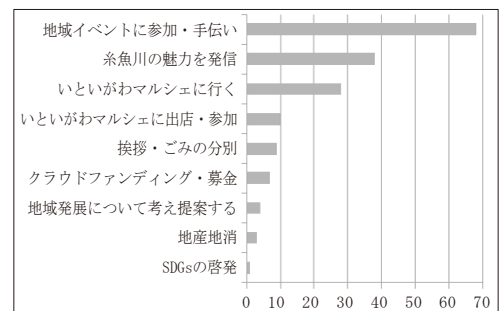
SDGsの目標	割合	生徒が考えた理由（一例）
8 働きがいも経済成長も	24.6	○出店者全員が働きがいを感じられて、この地域の経済を潤すことになると思ったから。 ○糸魚川の名物を食べに全国から来てもらえば、糸魚川の経済も成長すると思ったから。 ○イベントでたくさんのものを消費することによって、まちの経済成長につながるから。
11 住み続けられるまちづくりを	18.0	○このイベントが4年前の大火によって壊れた糸魚川を、また安心安全快適に戻そう、よりよい街にしようという思いから、企画、運営をしているのだと思ったから。 ○出店者が地域に経済効果をもたらし、そのお金が住み続けられるまちづくりになるから。 ○広い年代の方が楽しめるようになっていて、少子高齢化が進行している今でもイベントにたくさんの人が来ることでまちの活性化につながると思ったから。
12 つくる責任つかう責任	13.1	○出店者の手作りの品があったら、売る人にも買う人にも世界に1つのものだから愛着がわき、大切に使用してもらえと思ったから。
2 飢餓をゼロに	8.2	○試食で食べ物を提供し、誰でも気軽に食べることができるから。
15 陸の豊かさを守ろう	6.6	●陸で作った野菜を使用しているから。 ●ヒスイを扱う店があり、ヒスイを知ってもらうことでヒスイを守っていけるから。
14 海の豊かさを守ろう	4.9	●新鮮な魚を調理してお客さんに届けるから。
3 すべての人に健康と福祉を	4.9	○イベントを楽しむことによって心が元気になる、体も元気になるから。 ○おじいちゃん、おばあちゃんがチラシを見て、出かけてみようと思うから。
9 産業と技術革新の基盤をつくろう	3.3	○糸魚川にあるものをPRして、どんな仕事があるのか地域の人に知ってもらうため。

16	平和と公正をすべての人に	3.3	○地域の人が集まり、にぎやかになって、おいしい物を食べて、みんな笑顔になるから。
1	貧困をなくそう	1.6	○貧しい人も参加できるから。
4	質の高い教育をみんなに	1.6	●チラシを配ることによって、生徒が地域の活性化について学ぶ機会につながるから。
5	ジェンダー平等を実現しよう	1.6	○男女関係なく各店で協力し、イベントに参加できるから。
6	安全な水とトイレを世界中に	1.6	●食べ物を作るには水が必要で、安全な水を使わないといけないから。
7	エネルギーをみんなにそしてクリーンに	1.6	○地域で販売することでエネルギーを軽減でき、必要な分だけを使うことができるから。
10	人や国の不平等をなくそう	1.6	○イベントは制限がなく、誰でも自由に参加できるから。
13	気候変動に具体的な対策を	1.6	●台風で一度中止になっているから。
17	パートナーシップで目標を達成しよう	1.6	○みんなで協力するから。

生徒が考えた理由に注目すると、イベントが目標達成に直接つながると考えたもの（○）と、イベントが目標達成に向けて意識を変えるきっかけになると考えたもの（●）があることが分かる。SDG13とつなげた理由に「台風で一度中止になっているから」とある。第9回いといがわマルシェは当初10月に予定していたが、台風の影響で11月に延期になった。このことから生徒は、増加傾向にある大雨による被害と温暖化を関連付けて考えたことが分かる。他にも「野菜」「魚」「水」を環境に関連付けて考えており、生徒が物事を多面的に捉えようとしている結果だと言える。

イ 第2次 講演「地域発展のために自分にできることは何か」

いといがわマルシェ実行委員長をお招きして、イベントの立ち上げから開催までを講演していただいた。講演後に行った「地域発展のために自分にできること」という振り返りの結果から、育成を目指す能力・態度の(f)の契機に十分成り得たと言える。(図1)「吹奏楽部で演奏をする」「習い事で行っているチアリーダーングを披露する」など具体的な意見もあり、自分にできることを具体的に考えるというねらいに近づけた。さらに、注目すべきは「ごみの分別」「地産地消」「SDGsの啓発」といった一見すると地域発展とは関わりがないように思われる回答である。



(図1) 地域発展のために自分にできること。「SDGsの啓発」と考えた生徒は「以前、SDGsとマルシェの関係をグループで考えたように、糸魚川の取組とSDGsの関係を考え、それを実行している人たちと共有することが、糸魚川の取組の原動力になる」と振り返った。地域発展のためにSDGsの視点で物事を捉え、共有することの重要性に気づいている。

ウ SDGs啓発活動

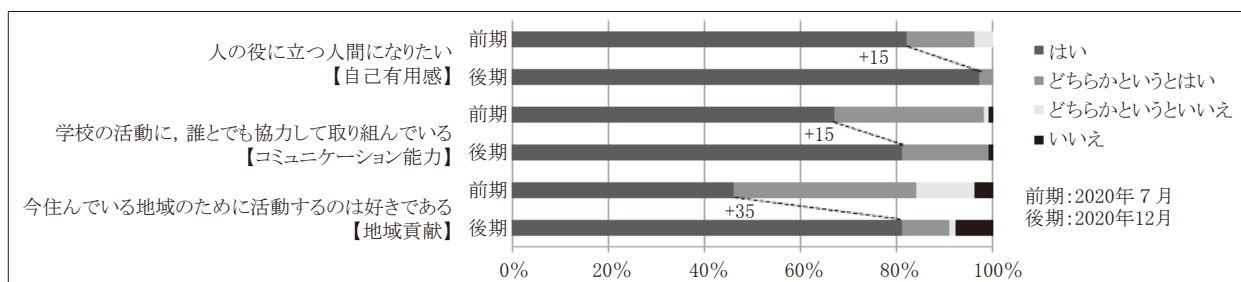
生徒は3年に進級し、学習プロセスは解決に向けて協働する段階になった。当初、清掃ボランティアなどの形で参加を予定していたが、新型コロナウイルス感染症対策のためイベントの規模が縮小されたこともあり、SDGs啓発活動、参加生徒は有志数名に絞った。学校での取組をパネル展示し、情報誌の配布、タブレットを使用した「SDGs認知度調査」を実施した。参加生徒は地域の人たちとの温かな交流を通して、糸魚川の良さを再発見したと活動を振り返っていた。



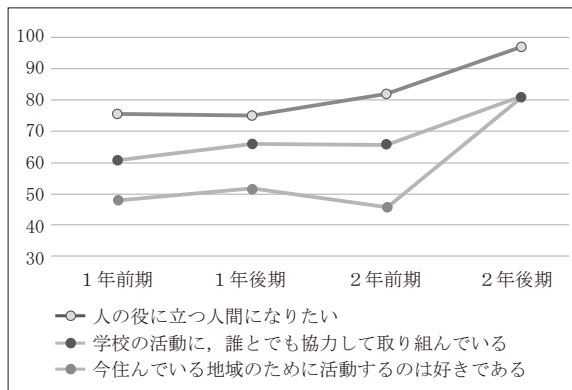
6 分析と考察

本実践の結果、学校評価アンケートの前期と後期で大きく変化した項目を(図2)に示した。

「はい」の割合がいずれも大幅に増加している。特に【地域貢献】は約1.8倍になり、「はい」「どちらかというとは



(図2) 2020年度学校評価アンケート前期・後期比較



(図3) 学校評価アンケート2019年度から2020年度の推移

い」という肯定評価の割合が90%を超えた。本校ではこの3項目の肯定評価90%以上を目指す成果と定めており、これを達成する結果となった。

(図3)は、1学年時(2019年度)からの推移である。実践を開始する2年前期までは「はい」と答えた割合はほぼ横ばいだが、実践後は上昇していることが確認できる。3項目が、ESDで育成を目指す能力・態度であること、実践後に変化が現れたことから、生徒の変容の背景にはESD授業計画に沿って進めてきたSDGs学習があると考えられる。つまり、SDGs学習の実践を通して、地域の取組や課題を17目標と関連させ具体的にイメージできるようになったことで、「他人ごと」ではなく「自分ごと」として課題解決に向けて主体的に取り組もうとする力が高まったと言える。

また、2020年12月に実施した生徒アンケートでは、18の質問のうち最も肯定的な回答をした項目を集計した結果、「学んだことを関わり合わせて考えをまとめることは大切だ」「課題を解決するには、色々な方法がある」と回答した生徒の割合は約27%であった。教科等横断的な視点にもとづいた単元計画によって、生徒は多様な手法を用いて問題解決をすることが可能となり、生徒の多面的、総合的に考える力の育成にもSDGs学習は有効であったと言える。

2学年を対象にスタートした本実践だが、徐々に「全校化」しつつある。生徒玄関ホールに設置したSDGsコーナーで学習活動の報告を行ってきたことで、他学年生徒にも「SDGs」というキーワードが広がり、関心を持つ生徒が増えてきた。生徒の変容は職員の変容にもつながり、各学年でSDGsを意識した学習活動が検討されるようになっていく。さらに、生徒の啓発活動は少しずつ地域へ広がり、市内の書店にはSDGsコーナーが設けられた。このような周囲の変容も、生徒の自己有用感や地域貢献への関心を高めていると言える。

7 成果と課題

地域の課題を「他人ごと」ではなく「自分ごと」として捉え、課題解決に向けて主体的に取り組もうとする力を高めるために、SDGsの17目標をESDに取り入れたSDGs学習は有効であった。また、教科等横断的な視点を意識したESD授業計画を実践することで、多面的、総合的に考える力を育てることもできた。一方で、ESDを計画的かつ継続的に行うための課題も見えてきた。地域の課題に対して生徒とどのように新しい価値を生み出し、どのように関わっていくのかという不定型のカリキュラムの編成に、教科担任制の中学校が対応できる体制づくりの重要性である。

今後は活動の最終目標である学習成果発表に向け、「SDGsを伝える」という活動を行っていく。現在、糸魚川市と連携し「持続可能なまちITOIGAWA実現プロジェクト」を進めている。地元企業や行政取材し、糸魚川市の魅力を市内外に発信することで、持続可能なまちづくりを後押しすることを目標としている。子どもたちの変容が持続可能な社会の実現の一助となることを期待する。

8 引用文献

- 1) 藤原孝章「SDGsに向けたESD実践を振り返る」、田中治彦・奈須正裕・藤原孝章『SDGsカリキュラムの創造』学文社、2021年、p.191
- 2) 藤原孝章「SDGs時代のカリキュラムづくり」、前掲1), pp.58-59
- 3) 田中治彦「SDGsと持続可能な開発のための教育(ESD)の課題」、前掲1), pp.18-19

9 参考文献

- 朝日仁美「『絵本でSDGs』の活動について」『学校図書館』No.848、2021年
- 角屋重樹「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究〔最終報告〕」、2012年
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」、2013年
- 持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議「我が国における『持続可能な開発のための教育(ESD)』に関する実施計画(第2期ESD国内実施計画)」、2021年
- 手島利夫「学校発・ESDの学び」、教育出版、2017年